

真の子どもの主体性を見取る 教師の主体性と協働のプロセスが彷彿とする本

教育が、理性を持った自律的な個の育成を目指して行われることに何の疑いもないのだが、伊那小学校の子どもたちを見てみると、このような「近代的な個」とは幾分異なったニュアンスを感じることがある。「はか／なさを知っている安堵感というか、軽やかさ、たくましさのようなものを感じるのである。個人の力では、はかる（「測る」「計る」「図る」「諮る」「謀る」）ことのできないことがあることを、活動の中で体験的に理解しているような人の在り方である。動物を飼えば、思いに反して別れや生き死にに直面する。作物だって思うようには育たないばかりか、大切に思っても最後は食べてしまう。そしてまた、それが美味しい。そのような感覚である。

無常を語る唐木順三が伊那小教育にいきっている。無常をつきつめた先に、無常が反転して自然と合一し、融解して還元した姿を、唐木は伊那小学校の子どもたちの中に見ていたのではないか。子どもたちは総合学習の中で直感している。生きていくためには、他の生物の命を貫わなければならない、自分一人では何もできないちっぽけな存在であることをよくよく心得ている。理性を武器に明晰に自己を主張する「近代的な個」を育てる教育が、忘れかけていた鈍いがたくてずっしりした「主体性」を育てる教育が、伊那小には息づいている。

伊那小学校が本を著すのは三十年ぶりである。この間に世界は一段とグローバル化し、一国ではどうすることもできない行き詰まり感の中で、泥沼の経済不況や自然災害が多発している。まずは教育から立て直すことなのであろう。骨太の「主体性」を育てる教育、それは時代の要請なのである。伊那小の本は著すべくして著された。そんな気がしてならない。

福井大学大学院教授 松木健一

四 伊那小教育を語る

—元校長へのインタビュー—

五 歴代学級題材一覧

共に学び共に生きる

—伊那小教師の物語—

監修 福井大学大学院教授 松木健一

一 “まこと” に生きる教師たち

・とらわれを棄てる

・子どもは無為にしてそこにいるのではない

・子どもから生命が付与される

・教師にとって授業は暮らしてある

・学校は「詩境」でなければならぬ

二 伊那小に在籍した教師の語り

三 伊那小での学びを語る

—卒業生へのアンケート調査より—

●仕様

A五判 並製 カバー装 ケース入り

①二二四ページ ②二四〇ページ

●定価

ケース入り二冊セット二九四〇円(税込)

各一四七〇円(税込)

